

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 丸山友美

【所属】 (助成決定時) 法政大学社会学部 兼任講師

【研究題目】

放送アーカイブを活用したドキュメンタリー表現の制作文化研究
——JOBK の取り組みにみる「上方」放送文化と人と番組のネットワークに着目して

【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、戦前戦後を通じて大阪放送局 (以下 JOBK) で形成される「上方」放送文化の展開を、人と番組のネットワークから明らかにすることを目的にもつ。これまで電波の届く範囲の人々が、同じ「時間」に同じ「もの」を視聴するという共同体験を積み重ねる姿から、放送は国民国家の中心的な文化装置、つまり東京への収斂として理解されてきた。だが、JOBK の取り組みを「中央＝東京」に対するローカルとして見直すとき、放送における政治的スペクトラムを押し広げようとした試みに気がつく。近年、社会学やエスノグラフィー、その他の関連分野でメディア制度の「制作文化 Production Culture」を論じる研究が欧米でさかんになっている。その代表例とされるのが、映画研究者の J. コールドウェルらが行う「制作 (文化) 研究 Production Studies」である。本研究は、こうした国際的な研究動向を鑑み、JOBK の足跡を整理する資料調査にとどまらない、在阪の放送局・放送史を分析する具体的な方途を提示する。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究は、以上の目的を達成するため、以下3つの作業テーマを掲げて研究に取り組んだ。

第一は、「紙史料および音資料 (インタビュー) の収集・整理」である。大阪の府立中央図書館や国際児童文学館、東京の国立国会図書館や法政大学図書館、放送博物館や放送文化研究所の協力を得て資料を渉猟した結果、これまで言及されてこなかった一次資料をさらに発見することができた。また、番組制作者やその遺族への聞き取り調査を実施し、放送史から取りこぼされてきた JOBK 制作者たちの「声」の史料化に取り組んだ。第二は、「JOBK 史を構成した放送人への聞き取りと資料調査」である。関西で活動する「自由ジャーナリストクラブ」の会員であり、1995 年刊『こちら JOBK』(JOBK70 年誌) の編集メンバーである小山帥人や大塚融氏とメールや電話にて定期的にコンタクトを取り、所有されている資料をお借りしたり、資料編纂室メンバーへの聞き取り調査を実施したりした。このようにして東京視点を備える「放送史」にほとんど残されてこなかった JOBK の歴史が、「誰に」「いかに」構成されてきたか検討するために必要な資料の収集を進め、これまであまり記述されてこなかった制作者の葛藤や対立といった歴史のグラデーションを描出することを試みた。第三は、「個別の番組分析」である。テレビ『日本の素顔』(1957-64) を中心に、ラジオ『社会の窓』(1948-) や『時の動き』(1950-)、『社会探訪』(1948-51) にくわえ、新たにテレビ『あなたは陪審員』(1961-62) の分析に取り組んだ。

【結論・考察】 (400字程度)

以上の調査と分析から次のように考察した。これまで調査・収集してきた一次資料は放送事業者の足跡を検証可能にする史資料であるだけでなく、放送番組という文化的産物を生み出してきた人々の営みの表象でもあるということだ。それはつまり、経営者から勤務者へ提示される経営方針や組織編成、人々を組織内で分業化し専門化する人事異動、聴取者や視聴者のニーズに対応するため不定期におこなわれる番組開発や編成改変というように、アイディアが構成され、番組が制作・放送されるようになるまでの組織内の決定と活動をめぐる「生活様式＝文化」についての表象である。

こうした視点の獲得は、JOBK 制作者たちの「声」の資料化を進める際の分析視覚としても有用である。

これまで報告者は、関東・関西圏において番組制作関係者や OBOG の所在調査をおこない、約 40 人にインタビュー調査をおこなってきた。その際、しばしば申請者に対し語られたのが、個別の経験にもとづいたドキュメンタリー番組制作に対する特定の価値、確信、あるいは仕事のパターンといった観点から表象されることになる番組制作のプロセスであった。そのようにして彼ら彼女らの語りを積み重ねることで見えてきたのは、制作現場において理解・共有されている適切な行動パターンや慣習といったインフォーマルなルールであり、それを支えるマネジメント戦略や部門別の組織編成といったフォーマルな仕組みや制度とは互いに分かれ難く結びついているということだ。

このようにして報告者は、テキストに内在するだけでは見えてこないテキストの外側、すなわちテキスト（放送番組）を生産する制作者の生きる「日常」を記述する「制作文化研究」の方途を用いて、現在、博士論文を執筆している。